「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえる方法論に関する検討
—TAT(Thematic Apperception Test)を導入する試み—

宗田直子*・岡本祐子*

Consideration of the Methodology of TAT (Thematic Apperception Test) on Identity, from the Viewpoint of "Individuation" and "Relatedness"

Naoko Sota and Yuko Okamoto

This paper is a review of psychological studies on Identity and TAT (Thematic Apperception Test), and also examines the possibility of TAT for concepts of Identity, and from the viewpoint of "Individuation" and "Relatedness".

The theory of Identity is constructed from the viewpoint of "Individuation" and "Relatedness". Especially, it is necessary to study Identity taking account of "Relatedness" with infants at an early stage. The TAT is recommended as an assessment to test for "Relatedness" at an early stage of development. The analysis of TAT is a recommended approach toward analyzing an interpersonal world. TAT seems to establish a theory of Identity from the viewpoint of "Individuation" and "Relatedness".

Key Word : Identity, TAT, Individuation, Relatedness

1．問題および目的

「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論の具体化が求められている。特に，近年では，発達早期の自我形成がのちのアイデンティティに及ぼす影響が注目されている。すなわち，発達の基盤である乳幼児期の自我，そして青年期のアイデンティティが，のちの人生の中で，どの次元で変容し，のちの発達を規定するのか（岡本，2002），青年期・成人期のアイデンティティと個体内関係性—つまり発達早期の自我のための「関係性」—がどのように関連するのか（宗田・岡本，2006）を明らかにしたアイデンティティ生涯発達論の展開が求められている。

アイデンティティを「関係性」の観点からとらえ直す主張がなされてきた中で，成熟したアイデンティティの様態をどうとらえるかという問題については，研究者間で見解の相違が認められてきた（岡本，2002）。「関係性」が「個」と別の軸として発達し相互に影響を及ぼし合い統合されていくというとらえ方（Franz & White，1985；岡本，1997）と，「関係性」は「個」の基盤であるというとらえ方（Josselson，1992；杉村，1999）の相違である。これについて宗田・岡本（2005b）は，岡本（1997）のいう心理的・個体内的次元と社会的次元の「関係性」という，「関係性」の次元

*広島大学大学院教育学研究科(Graduate School of Education，Hiroshima University)

のとらえ方の相違が見解の相違をもたらしているのではないかと指摘した。さらに宗田・岡本(2006)は，「関係性」の次元について再考察している。すなわち，「関係性」の次元には，自我形成のための「関係性」，青年期のアイデンティティを獲得するための「関係性」，成人期以降に次世代のアイデンティティ形成の援助として発揮される「関係性」といった，発達に伴うさまざまな次元がある。

「関係性」の次元をとらえるうえでJosselson (1992, 1994) の見解が有用である。Josselsonは，人間相互の間に存在する空間を埋め合わせる，主要な 8 つの方法—抱きかかえ (holding)，愛着 (attachment)，熱情的な体験 (passionate experience)，目と目の確認 (eye-to-eye validation)，同一化 (identification)，相互性 (mutuality)，埋め込み (embededness)，慈しみ・ケア (tending and care) について述べている。このうち最初の 4 次元は乳児期から見られるものであり，次の 4 次元は幼児後期からみられるとされていることから，前者を個体内関係性，後者を社会的関係性ととらえることができ，これをアイデンティティ形成における「関係性」と考えることができる。

一方，「個」は，長年，アイデンティティ研究の中で扱われてきたように，「自分は誰であるのか」という発達の方向性をもち，分離-個体化の発達，自律的行動，自己と他者の不可侵性を特徴としている (山本，1989；岡本，1997)。

以上のような「個」と「関係性」を実証的にとらえる方法として，現在，質問紙尺度の開発が試みられている (宗田・岡本，2005a，2005b；山田・岡本，2006)。本研究では，さらに，投影法，中でもTAT (Thematic Apperception Test) が「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえる方法として有用ではないかと考える。そこで本研究では，TATが，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論の具体化に用いられる可能性について，方法論的観点から考察することを目的とする。まず，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究について述べ，次に，近年の日本におけるTAT研究の動向をまとめる。これらをふまえ，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論の具体化へ向けてのTATの可能性を提案する。

2.「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究

(1)アイデンティティに関する研究

Erikson (1950) によれば，アイデンティティの観念とは，過去において準備された内的な斉一性と連続性とが，他人に対する自分の存在の意味—「職業」という実体的な契約に明示されているような自分の存在の意味—の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積み重ねのことである。この概念を実証するために，多くの研究がなされてきた。質問紙による測定法の開発 (宮下，1987；谷，2001ほか)，半構造化面接の開発 (Marcia，1966；無藤，1979)，アイデンティティ・ステイタスの判別尺度 (中西，1983；加藤，1986)，また，アイデンティティ発達に関する縦断的研究 (加藤，1989；杉村，2001) などである。特に近年では，アイデンティティ形成に関わる他者 (あるいは集団) に焦点を当てた研究が多く行われている (杉村，1999；三好，2001；奥田・前田・岡本，2003)。さらに，先述したように，アイデンティティを「個」と「関係性」からとらえる尺度の作成が試みられている (宗田・岡本，2005a，2005b；山田・岡本，2006)。

岡本 (1994) は，成人期のアイデンティティ発達過程は，青年期に獲得されたアイデンティティ

がさらに問い直され，再体制化されて，ラセン的に発達，成熟していくことを実証研究からモデル化している。成人期にアイデンティティの問題が現れることは今や一般的となり，実証研究も盛んに行われつつある（清水，2004，2006；清水・杉村，2006；岡本，2006b）。このような中で岡本（1997）が提唱した「個」と「関係性」理論は，成人期のアイデンティティをとらえる2つの軸であり，この観点からの応用的実証研究が行われている（永田・岡本，2005；渡邉・岡本，2005）。

(2)「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究の現状

アイデンティティ発達を，分離－個体化の次元のみでなく，「関係性」の文脈からとらえ直そうとする試みのなかで，「個」と「関係性」の2つの軸としてとらえた理論研究は，Gilligan（1982）にはじまり，岡本（1997）に続く。また，Franz & White（1985）は，人間の発達における個体化の経路と愛着の経路の複線モデルを提唱している。

実証研究としては，山本（1989）がGilligan（1982）の「自己」の二面性が発達的にどのように変化し，また男女でその様相がどのように異なっているかという点について，青年期以降成人期を通じた実証的な研究はほとんど見られないことを指摘し，青年期から成人期までの男女を対象に，Separatedな側面，Connectedな側面として表わされる「自己」の二側面を意識の面から測定する尺度（S尺度，C尺度）を構成し，発達差と性差を見出している。このSeparatedな側面（例えば，自律的行動），Connectedな側面（例えば，思いやり）を，岡本（1997）は，「個としてのアイデンティティ」，「関係性にもとづくアイデンティティ」の特徴であるとしている。宗田・岡本（2005a，2005b）は，山本（1989）の作成したS尺度とC尺度が，「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」を測定できる尺度であるかについては問題点があると指摘し，尺度の再構成を試みている。しかし，この尺度も，項目を洗練すること，因子的妥当性と構成概念妥当性のさらなる検討の必要性などの課題があり，標準化は今後の課題である（宗田・岡本，2006）。

「個」と「関係性」について，「関係性」が「個」の基盤であるととらえた研究（Josselson，1992；杉村，1999）は，先述したように，青年期にアイデンティティを獲得するまでの「関係性」に焦点を当てていると思われる。宗田・岡本（2006）が指摘するように，Josselson（1992，1994）のいう8番目の次元の「関係性」―慈しみ・ケアは，青年期までと成人期以降では区別して考える必要があるだろう。つまり，青年期までに特有の慈しみ・ケアと，成人期以降にみられる慈しみ・ケアを考慮した，9次元の「関係性」をとらえる必要がある。

さて，近年のアイデンティティ研究は，自我の基盤である個体内関係性が，のちのアイデンティティに及ぼす影響に関心が高まっているといえる（岡本，2002；宗田・岡本，2006）。ここでもう一度，Josselson（1992，1994）をみてみると，以下のように，自我形成の基盤となる4次元の個体内関係性がみとめられている。抱きかかえ，愛着，熱情的体験，そして，目と目の確認である。第1の次元，抱きかかえは，安全と基本的信頼を表すものであり，支えられているという発達早期の経験（対概念は，落ちていくことへの恐怖）である。第2の次元，愛着は，特別な他者（母親的人物）との関係であり，抱きかかえとは違って，外部の対象に要求するものである。第3の次元は熱情的な体験，これはリビドーの初期の形であり，性的結びつき，あるいはその象徴的な表現を通して，（自己と他者の）分かれている空間を克服することである。第4の次元，目と目による確認は，

他者に対して重要であるという感覚，存在することの必要性を，目と目を合わせることによって経験することである（Josselson，1994）。

「関係性」の次元をとらえることは，例えば，青年期・成人期においてアイデンティティの危機に遭遇したとき，過去からつみあげてきたアイデンティティ形成をとらえることにより，発達援助に役立てることができると思われる。ここで，個体内関係性を実証し，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論を具体化すること，あるいは，発達援助を目的として個体内関係性を査定することに，投影法が有用ではないかと思われる。なぜならば，個体内関係性は発達早期の関係性であり，意識水準で検討することに限界があるかもしれないからである。つまり，アイデンティティ研究において広く用いられてきた質問紙尺度や半構造化面接では，発達早期の重要な他者との「関係性」は想起されにくいと思われるからである。この点，投影法は，方法論的に無意識のレベルで測定することが可能であるといった利点がある。もちろん，ディープ・インタビューで発達早期の「関係性」を推測することは可能であろうが，さらに投影法を用いることで，青年期・成人期といった現在のアイデンティティに影響を及ぼしている個体内関係性が，より鮮やかにとらえられると思われる。

本研究では，これまで述べてきた「個」と「関係性」からみたアイデンティティを検討するための投影法として，TAT の可能性を提案したい。TAT は，以下に述べるように，対象関係の査定に有用であることが示唆されており，また，鈴木（2004）が述べるように，人間場面の中から自己に親近なものが選別されるといった心的プロセス・反応算出のメカニズムを有していることから，アイデンティティにおける個体内関係性の検討に有効な方法であると思われる。次に，アイデンティティ研究への TAT の可能性を提起するために，日本における TAT 研究の中で特に有用と思われる文献をレビューする。

3．日本における TAT 研究の動向

TAT は，Murray によって 1943 年に完成された。提示した絵から物語を構成させるという心理検査である。Murray の提唱した欲求 - 圧力分析は，物語の主人公はほぼ被検者自身を表しており，主人公の衝動，願望，意図など，環境に向かって発する力（欲求）と，環境から主人公に対して発する力（圧力）とを詳細に吟味すれば，被検者の行動の支配的な動機と環境のとらえ方を理解できるとするものである（鈴木，1992）。しかし，適用，スコアリング，解釈は，少なくとも日本では，使用者各人の「直感」に委ねられている（鈴木，1998）。Murray の欲求 - 圧力分析によらない，独自の分析法が提案され（山本，1992；鈴木，1997），さらに近年では，検査者の「主観的解釈」が再強調されている（海本，2004，2005）。

TAT 研究をレビューするために，CiNii（NII 論文情報ナビゲータ　国立情報学研究所）において，近年の日本における TAT 研究を検索した。キーワード検索（TAT）=1138 であり，これには，他の外国語の略語が多く含まれていることが推察されたため，キーワードを絞り込んだところ，（Thematic Apperception Test or 主題統覚検査 or 絵画統覚検査）=25 であった。その他，TAT 研究が比較的多い京都大学の文献と，近年の TAT 研究が引用している関連のある文献を収集した。

また，筆者が参加した学会において発表されたTAT研究を収集した。なお，（TAT and アイデンティティ）=0，（TAT and 自我同一性）=0であり，（Thematic Apperception Test and 同一性）=1，石谷（1994）の研究のみであった。このことからアイデンティティ研究においてはTATがほとんど用いられていないことが伺われる。

収集した文献のうち，(1)TATの解釈に関する研究，(2)TATからみた対象との関係に関する研究，(3)TATからみたアイデンティティに関する研究，(4)方法論的観点からみたTAT研究の特徴，(5)「語ること」の意義に関する研究のレビューを行い，方法論的有用性の観点から，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究へのTATの可能性を考察する。

(1) TATの解釈に関する研究

1）TATの解釈に関する研究—TAT図版・TAT反応の検討

日本においては，さまざまなTAT解釈が提案されている。山本（1992）は，TAT物語が物語を創る人の「かかわり」の基本像をあらわすものであると述べている。「かかわり」とは，物語の創り手自身の自己の内的世界に映る自己の欲求や外界からの圧力に対する対処過程である。TAT物語は，自発的な体験過程を基礎に自由な設定と状況の中での自由な選択を含むひとつの創造過程であり，TAT物語の中で展開する選択様式，つまり，かかわりの基本像は，日常生活での行為にひそむ自分らしい行動様式や態度とみごとに一致するとしている（山本，1992）。

このようにTAT解釈に関する見解が提示されているが，鈴木（1992）は，山本（1992）は「総論」を述べており，「各論」の部分が乏しく，実際の反応解釈につなげるのは容易でないと指摘している。鈴木（1997）は，TATから明らかにされるパーソナリティの枠組みとして，Ⅰ　対象とのかかわりの基本的な側面（対象に向かわせる何か，対象の把握，対象に対する反応），Ⅱ　人との関わり方の一般的傾向（対他者，対自己），Ⅲ　対象別のかかわり方の傾向（対家族・対「親」・対父親・対母親・対同胞・対異性），Ⅳ　人間生活における重要な事物・事象へのかかわり方（性愛・死・病・仕事・権威・地位・悪・自然・美・その他），Ⅴ　病理的問題（希死念慮・強迫傾向・不安・妄想傾向・薬物嗜癖・離人症）を示している。そして，各側面を推測させる特定のカードと反応について述べている。鈴木（1997）の反応解釈は，直接的に反応から意味を汲み取っていく「直観法」であるが，その背景には膨大なTAT反応の分類が行われている。

近年，豊田・赤塚（2004）は，防衛機制の水準という視点から，TATプロトコールを分析する方法を提案している。それによると，①防衛破綻（精神病的人格構造）レベル—自分と図版との間の自我境界機能がなくなっている水準，②原始的防衛（境界例的人格構造）レベル—心の安全装置である防衛機制が働かず，攻撃性・破壊性という原始的な衝動性がそのまま表現されてしまう水準，③防衛過剰・不足（神経症・不適応人格構造）レベル—打消し・取消，対人関係の抑圧，隔離といった防衛機制がみられる水準，というように，事例にみられたTATプロトコールから病態水準をとらえる視点が示されている（豊田・赤塚，2004）。

以上のように，TATに関してさまざまな分析・解釈法があるということは，同時に，検査者・研究者が自らの解釈法を模索することの必要性と，TAT物語をいかに読むかという臨床家としての訓練の必要性が示されているということである。

2)「主観的解釈」に関する研究

近年のTAT研究では，読み手の「主観的解釈」とそのための訓練の必要性が強調されている。海本（2004）によると，解釈は，検査者が被検者のTAT物語をいかに読むかに委ねられており，物語を読んだ際の読み手の内部に起こってくる直観，感覚，感情，思考など，機械的に分類することが出来ない領域こそ，TAT物語を捉える根幹となる（表1）。さらに海本（2005）は，TAT解釈の手がかりとして，「繰り返し表現されるもの」を挙げ，ナラティブの観点から考察している（表1）。家族を中心にさまざまな人々の相互作用によってたえず構成されつつある「物語」が個人の中にはあり，その「物語」によって行為するのだというもの，つまり，経験の中で生成され，無意識のうちに繰り返してしまう物語のプロット（筋書き）が個人の中に存在するという視点が重要であるというものである（海本，2005）。

このナラティブの観点は，アイデンティティとも関連が深いと思われる。「語ること」の意義は後述するが，岡本（2006a）が指摘するように，人生のつみ残されてきた葛藤の意識化と再吟味は，語りを通して行われるといえる。海本（2005）が示唆するように，TATにナラティブ・ストーリーの要素があるとすれば，TAT物語を語ることは，語り手自らのアイデンティティの語りであるといえるかもしれない。

3) TATの内容分析の重要性に関する研究

山下（2004）は，ロールシャッハ・テストの体験型によるTAT評定尺度の差はみられないものの，TATの内容分析からは，ロールシャッハ・テストの特徴的指標をもつ事例の対象との関係のパターンが明らかになっていることを実証した。また，鈴木（2004）は，TATの課題は意図なくしては生じ得なかったものであり，正答追求的性格を帯び，量的分析を困難にすると述べている。これらは，TATの内容分析の重要性をあらためて示すものである。

表1　TATの「主観的解釈」に関する研究

著者	年代	目的・仮説	方法	結果・考察
海本理恵子	2004	①「アーンストの事例」の再検討，②TAT誕生から現在までの研究を追い，TAT解釈について考察し，物語の読み手としての検査者の重要性を示すことを目的とする。	文献レビューと理論的考察	アーンストの事例は，①さまざまな場面で，さまざまな形で，繰り返し出現するような主題がTAT物語に表現されること，②TAT物語から，読み手は自由なイメージを持つことが許されることという重要な特徴が示されている。TAT以外の場所で得られた主題がTATにおいてどのように表現されるかも視点に入れておくべきである。現在のTAT研究は，読み手の主観領域への回帰の方向にある。自らにフィットするTATの捉え方を見つけていくことが重要であり，それを援助するようなものが今後の研究に望まれる。
海本理恵子	2005	TATにおいて，創り手の中にある主題やプロットが，行為としてTAT物語に表されていると考えられることを，TAT物語の修正という方法を用い，考察する。	Ss.：大学生・社会人男女108名。方法：①Murray版4枚（3BM，10，17GF，20），②TAT物語記入用紙，③サンプル物語提示用紙，④物語に関する自由記述用紙，⑤修正用紙，⑥修正に関する自由記述用紙。	①自分物語と他者物語の修正の仕方―自分物語よりも他者物語のほうが，物語の結末を修正するという傾向が強いことが見られる。他者物語よりも自分物語のほうが場面を何の変更も加えず保とうとするあり方が現れやすかった。②（すべての物語で修正をした）被検者Aの事例―他者物語とその修正では，プロットは踏襲されていない。③TAT物語には，自らが構成してしまうパターンというものが表れる。TAT物語には，ナラティブ・ストーリーの要素があると考えられる。

(2) TATからみた対象との関係に関する研究

広瀬・氏原（1987）は，対象関係的思考よりTATを解釈している（表2）。それによると，TAT解釈は，「Murrayと同様に同一性仮説に従い，物語の主人公がいかなる行動をとり，またその背景にいかなる環境を設定するかという観点から，被験者の人格を力動的に推論しようとする」第1水準と，「被験者がテスト状況で，いかに図版とかかわっているかという」第2水準に分けられる。そして，反応に示された人物像が被験者の何を示唆するのかという点を考慮した上で，被験者と示された人物像の相互のかかわりに重点を置くべき（つまり，対象関係論的な内的対象論を前提とするべき）であるとしている（広瀬・氏原，1987）。1事例を対象関係的に解釈した結果は表2のとおりであるが，広瀬・氏原（1987）は，TAT解釈は，解釈者自身が被験者の反応に深くコミットし，それによって得た解釈者自身の直観的・主観的な印象を手がかりとしたものであり，TAT解釈は，心理療法過程へ入るときに，門口で解釈者自身が被験者と共に歩んでいくための道標であると述べる。さらに，広瀬・氏原（1989）は，自我像のPositive・Negativeな側面と対象関係との関係について検討した。表2のように，自我像のPositiveな側面にNegativeな側面が加わることで，色合いの深い人間のPositive・Negative両面を含んだ対人関係をもつ可能性が生まれるといった，自我像と対象関係について導き出された仮説をまとめている（広瀬・氏原，1989）。

また，山下（2003）は，TAT反応からみた対象との関係を検討しており，異性愛関係が重視されていること，母子関係のあり方が問い直されていること，攻撃性の表現において能動性が認められること，といった特徴を報告している（表2）。

これらの研究は，いずれもTATから示される対象との関係を検討しているが，図版によって出現しやすい関係が異なっていることが指摘されており（山下，2003），より多くのカードを用いる必要

表2 TATからみた対象との関係に関する研究

著者	年代	目的・仮説	方法	結果・考察
広瀬　隆 氏原　寛	1987	TATの1事例をあげ，対象関係的な観点を基に解釈を試みる。	S.：女子大学生3回生。 方法：Murray版12枚（1, 2, 3GF, 4, 5, 6GF, 7GF, 10, 12F, 13MF, 19, 20）。	本事例の被験者の課題は，対人関係における溝を埋めていくこと，女性としての身体性や対人関係において生じる否定的な情緒を排除するのではなく，いかに対象関係の中で生きたものとして体験しながら，かつそれらに圧倒されないで対峙できるかということになりそうであり，セラピストークライエント関係でこれを補っていくこととなると思われる。
広瀬　隆 氏原　寛	1989	TATの事例を挙げ，自我像のPositive・Negative両側面と対象関係との関係について検討し，実証的研究をも含めた今後の研究のための仮説構築を行うことを目的とする。	Ss.：男女大学生55名。 方法：TSPS-Ⅱ，TAT図版3枚（2, 3BM, 5）。	①自我像のPositiveな側面を持つことで他者像の中に肯定的な特徴を見出せること。②自我像のPositiveな側面がないことは他者像の中に否定的な側面を認めることにつながること。③自我像のPositiveな側面にNegativeな側面が加わることで，色合いの深い人間のPositive・Negative両側面を含んだ対人関係をもつ可能性が生まれること。
山下京子	2003	TAT反応を収集し，鈴木（1997）の分類基準にしたがって分類を組み，TAT反応に示された対象との関係を検討することを目的とする。	Ss.：大学生女子54名。 方法：TAT図版20枚（1, 2, 3BM, 4, 5, 6GF, 7GF, 8BM, 9GF, 10, 11, 12F, 13MF, 14, 15, 16, 17GF, 18GF, 19, 20）。	①TAT反応に示された対象との関係の特徴は，異性愛関係が重視されていること，母子関係のあり方が問い直されていること，攻撃性の表現において能動性が認められることである。②図版によって出現しやすい対象との関係が異なっている。

性（広瀬・氏原，1989）や TAT 反応を各図版において分類する必要性（山下，2003）が考察されている。

以上の研究にみられるように，対象との関係について自己のあり方を問う視点，あるいは対象への内的なイメージをどのようにもつかという視点は，アイデンティティをとらえる際の個体内関係性がどのように築かれているかと共通する視点であると考えられる。つまり，母親との関係に着目すると，語られる母親イメージ（良いイメージあるいは悪いイメージ）は，個体内関係性の達成の程度―発達早期に母親との十分にあたたかい関係が築けたかどうか―と関連すると思われる。例えば，広瀬・氏原（1987）は，語り手が，図版 5 において，はぐくみ見守ってくれるような母性的なものを見出せないこと，また，図版 7GF から「『家政婦さん』が『全然話にのってくれない』」という反応を示したことから，語り手の内的世界において，「母なる対象イメージは，自分を導き支持してくれるものとは程遠いようである」と考察している。このように，TAT 反応から語り手の個体内関係性を推測することが可能である。

(3) TAT からみたアイデンティティに関する研究

TAT を用いてアイデンティティを検討した研究をレビューする。石谷（1994）の研究は，男性のアイデンティティ・ステイタスを対人関係のあり方（親密性・依存性・関係性の拒否）から力動的に理解しようとしたものであり，質問紙（同一性地位判別尺度，依存性質問紙）と TAT（投影的関係性）を用いて検討している。全体的考察は表 3 のとおりであるが，TAT から得られた結果は主に次のとおりである。①家族カードでは，「達成」では約半数が分離・独立の主人公を描き，「モラトリアム」の約 1/3 が存在拠点の不確かさや揺らぎを主人公に語らせ，「拡散」では人物が自己閉鎖的になっている点に特徴が見られた，②母親カードでは，「拡散」のみ母親が息子との交流をもてないとするものがみられた，③同性カードでは，「拡散」は自分よりも充実している他者との出会いによって，自己の無力感が自覚される体験を語るのが特徴的であった，④異性カードでは，「達成」および「モラトリアム」では，関係の喪失や別離に伴う適切な感情表現が語られ，「拡散」においては「関係」が 2 人の意図や努力と関係なく崩壊する筋が目立った，⑤集団カードにおいては，「モラトリアム」は主人公が自己を守り発展させるために，集団から離れようとする物語を多く語った（石谷，1994）。以上のように，アイデンティティ・ステイタスにより TAT から語られる「関係性」の内容が異なっていることは，重要な知見である。

また，清水（2006）は，TAT 物語における「しなやかなアイデンティティ」―「強さ」と「やわらかさ」をともに達成したアイデンティティ―を，葛藤の解決過程に注目して検討している。その結果，「しなやかなアイデンティティ」達成者の TAT 物語は主人公が葛藤の解決に大変主体的であり（「強さ」），その解決過程は他者を取り入れたり利用したりして，状況に折り合っていく様子（「やわらかさ」）が特徴的に現れた（清水，2006；表 3）。

さらに，葛西（2006）は，Marcia（1966）が提唱したアイデンティティ・ステイタスのフォークロージャー（以下，F）に焦点を当て，F 的心性の強い青年の親への態度を，質問紙尺度（F 尺度他），TAT，半構造化面接を用いて検討している（表 3）。その結果，F 的心性高群の TAT 物語は，「子どもと親（養育者・大人）がお互い理解しあっていないストーリーを作っていることが多い」こと，

中群は，「これまで親の言うとおりに来たが，自分の本心に気づき，親に反発して自立をしていく現状にあるのではないか」ということ，低群は，「家族関係や親子関係への言及が少ない。語ったとしても，自分からは距離を取ろうとする態度が見受けられる」ことが明らかになった（葛西，2006）。

以上のように，アイデンティティ研究にTATを用いた研究は，他者（親，母親，家族，異性，葛藤解決過程における他者）との投影的「関係性」を検討することを目的としているといえる。ここで，先述した，近年の「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究へのTATの意義が明確になってくる。石谷（1992）の研究において，アイデンティティ「達成」群が分離・独立の主人公を語ることが明らかになったが，これは本研究における「個」のテーマであるといえる。つまり，「個」が確立している者は，分離・独立の主人公を語り，確立していない者は揺らいだ主人公を語ることが推測される。また，清水（2006）にみられるように，アイデンティティ達成者は他者を取り入れたり利用したりする「関係性」—社会的関係性—に関する語りを行うことが推測される。

表3　TATからみたアイデンティティに関する研究

著者	年代	目的・仮説	方法	結果・考察
石谷真一	1994	男子大学生の同一性形成と対人関係性との関連を検討する。同一性地位によって「関係」の正負の志向性とその質が，意識水準と投影水準にわたって，どのように異なるかを吟味する。	Ss:男子学生157名。うち，TAT実施は101名。 方法：同一性地位判別尺度，依存性質問紙，TAT図版9枚（Murray版の2，3BM，4，6BM，9BM；親密性動機測定のためのカード2枚；筆者作成2枚）。	①「達成」群および「達成-権威受容中間」群の対人的関係性は，相互的で親密なかかわりへの準備性や，競争的場面でも安定した対人関係を持ち得る準備性を伺わせる。②「権威受容」群は限定された価値観や役割に縛られ，不満足ながらも従わざるを得ない自己の在り方が伺われた。③「モラトリアム」群は，既存の生活に安住できず，分離-個体化を指向しようとする心性が伺われた。④「拡散-モラトリアム」中間群は，抑鬱傾向を示しながら，状況に前向きに対処する意欲の乏しさが伺われた。⑤「拡散」群は，分離-個体化に向かう基盤的関係の脆さと他者を脅威に感じて避ける傾向の強さ，対人関係を自己の努力と結び付けられない無力感が示された。
清水紀子	2006	アイデンティティの「強さ」と「やわらかさ」をともに達成した「しなやかなアイデンティティ」の様相をより深く確認するためにTAT物語における葛藤の解決過程に注目する。	Ss.：17名（44～65歳）。 方法：アイデンティティしなやかさ尺度，TATマレー版6枚（図版1，2，3BM，6BM，18BM，20），アイデンティティの再構成過程を確認する回想法。	①「しなやかなアイデンティティ」達成者はほとんどの物語に葛藤を設定した。②他の類型（凝固・中間・浮遊・虚弱）では，全図版に葛藤を設定しない人も見られたが，葛藤を設定しても解決を回避する例があった。③「しなやかなアイデンティティ達成者」の物語では，主人公が葛藤の解決に主体的であり，その解決過程は，突破口を求めて他者のサポートに頼ったり他者の考え方を取り入れて利用したりして状況に折り合っていく様子が特徴的に現れた。
葛西里佳子	2006	フォークロージャー(F)的心性を持つ青年の親に対する意識・無意識的態度，および，第1次・第2次心理的離乳の様相を検討する。TATにより潜在的な親子関係を打診する。	Ss.：大学生92名（F尺度），大学生385名（親への態度項目），うち，TATと面接協力者11名。 方法：F尺度，親への態度項目，第1次心理的離乳尺度，第2次心理的離乳尺度，TAT（図版1，2，5，6BM，6GF，7BM，7GF，18GF），半構造化面接。	各群のTAT物語は，①F的心性高群「子どもと親（養育者・大人）がお互い理解しあっていないストーリーを作っていることが多い」，②中群「これまで親の言うとおりに来たが，自分の本心に気づき，親に反発して自立をしていく現状にあるのではないか」，③低群「家族関係や親子関係への言及が少なく，語ったとしても，自分からは距離を取ろうとする態度が見受けられる」ことが明らかになった。

(4) 方法論的観点から見たTAT研究—TATからみた臨床群・非臨床群の特徴に関する研究

さて，TAT研究を概観すると，臨床群，非臨床群を対象として，その特徴を探索的に明らかにすることを目的とする研究が多くを占めている。TATの使用法を検討するために，TATからみた臨床群・非臨床群の特徴に関する主要な文献の著者名と，おおまかな目的，方法，結果と考察を表4に示した。ここから分かるように，臨床群を対象とした場合，統制群を設け，両者のTAT物語の比較の観点から考察をすすめている研究が比較的多いといえる（井口，2001；土井，2002a，2002b；関山，2003；石原，2003；藤本，2005；表4)。また，質問紙とTATを併用して臨床群・非臨床群の内的世界もしくは人間表象を検討している研究がみられる（原田（慶澤），1999，関山，2001；土井，2003；高橋，2005；一木，2006；表4)。これらの研究は，いずれもTATを用いて人間の内的世界の特徴を明らかにしようとするものであり，その背景には，人間理解とよりよい臨床的援助を目指すという目的があるといえよう。

TAT使用法の観点から見ると，臨床群と統制群を設けること，あるいは，質問紙によって操作的に分類される類型もしくは得点による群分けが行われることにより，TATの語りの質的な特徴をより明確にできると考えられる。先述したように，アイデンティティ研究においても，アイデンティティ・ステイタスによるTAT物語の検討（石谷，1994)，「しなやかなアイデンティティ」を検討する尺度による類型ごとのTAT物語の検討（清水，2006)，フォークロージャー尺度の得点（高・中・低）によるTAT物語の検討（葛西，2006）というように，質問紙による類型化を行った上でのTAT物語の検討がなされており，これらは方法論的にTATの有効的な使用法であるといえる。

(5)「語ること」の意義—TATの治療的有効性に関する研究

最後に，「語ること」によるアイデンティティのとらえ直しの観点を記したい。草島（2005）は，女子大学生A子の事例を示し，TAT物語をきっかけに自己を物語ることで，過去を再構成し，自己の語り直し，自己の変容を促すというTATの治療的意味を考察している。

TATを治療的に用いた研究が少ない中で，草島（2005）の研究は，語ることによる過去の再構成をTATの治療的意味ととらえている点で興味深い。TAT物語が，自己を物語ることで，過去の経験を再構成し，現在，未来を結びつける役割をもつといった草島（2005）の考察は，TATにおいて「語ること」は，まさにアイデンティティのテーマそのものであることを示唆している。近年，ナラティブ・セラピーが注目されるようになり，語ることにより心の活力が増大することに関心が寄せられている（岡本，2006a)。そして，岡本（2006a）が述べるように，アイデンティティの再体制化とは，中年期のアイデンティティ危機・転換期に，自分の生活のあり方を主体的に考え，組み立てなおしていくこと，積み残されてきた葛藤を意識化し，吟味していくことである。これは，心理療法過程における人生の見直しと再生のプロセスでもあり，これこそが「語る」ことの意味であるといえる（岡本，2006a)。

ただ，TAT研究においては，海本（2005）がナラティブの観点を示唆しているものの，「語ること」の治療的有効性を実証的に検討したものは，筆者の知る限り，草島（2005）の研究におけるA子の1事例のみであり，TATにおける「語ること」の意義，アイデンティティのとらえ直しの観点は，今後，さらに研究の発展が期待される。

表 4 TAT からみた臨床群・非臨床群の特徴に関する研究

著者	年代	目的・仮説	方法	結果・考察
原田(慶澤) 華	1999	青年期の対人的な孤独感と自己受容，幼児期の愛着関係の関係について質問紙で検討する。TAT 物語より孤独感の強い青年の内的世界を探る。	Ss.：中学生 232 名，大学生 232 名。 方法：Harvard 版 TAT 図版 5 枚（1，6BM，11，14，20），改訂版 UCLA 孤独感尺度，自己受容尺度，母親・父親との愛着体験尺度。	①1 図版では，悩みが「解決されるもの」が孤独感低（L）群に，「解決されないもの」は孤独感高（H）群に多く見られた。②6BM 図版では，二人が「対立および拒絶」の関係にある物語，悲しみや心配が共有されていない物語が H 群に多く見られた。③11 図版では，危機や厳しさが「克服」されるものと「死」ぬものは，H 群に多かった。④14 図版では，悩みが「解決されるもの」が L 群に，「解決されないもの」は H 群に多く見られた。⑤20 図版では，「解決」は L 群に，「死」は H 群に多く見られた。
西本智恵	2000	慢性腎疾患患児を対象に，描画検査・TAT を実施し，患児の内面を明らかにすることを目的とする。	Ss.：慢性腎炎の患児 4 名，ネフローゼ症候群の患児 4 名。 方法：描画検査（樹木画・人物画），ハーバード版 TAT 児童生徒用（BG 版），面接。	①慢性腎炎の事例全体では，TAT では，主人公が困難な状況や不当な状況を自力で乗り越えていくというテーマが全事例に共通して見られた。②ネフローゼ症候群の事例全体では，TAT では，依存と自立をめぐる迷いや葛藤が表現されたテーマが多かった。ネフローゼ症候群の事例には，将来の不安などの再発性疾患特有と思われる心理的特徴が見られた。
井口敏之	2001	中学生以上の不登校症例のパーソナリティを明らかにするために TAT を用い健常群と比較検討する。	Ss.：不登校症例 17 例，健常対照群 36 例。 方法：TAT ハーバード版 22 枚（男女共通：1，2，3BM，4，5，8BM，9GF，10，11，12BG，13MF，14，15，16，19，20；男子：6BM，7BM，9BM，12M，17BM，18BM；女子：6GF，7GF，8GF，12F，17GF，18GF）。	不登校症例の特徴としては，①有意に反応失敗が多く，また，話を具体化することが出来なかった。②一般によく見られるテーマの反応が少なかった。③人物の情緒の明らかでない話が少なくなかった。④男性性・女性性，異性愛が未発達。⑤柔軟性がない。不登校の子どもたちは，現実の外界の把握がしっかり出来ない，内的男性・女性イメージの発達も悪く，自己同一性も確立されていない，情緒も未発達で共感しにくい部分も見られるなど，未熟で弱い自我機能の子どもたちが多いことを指摘した。
関山 徹	2001	強迫性格者がもつ人間表象の特徴を検討する。	Ss.：女子大学生 146 名。 方法：強迫現象尺度，反応領域表，SCORS-C，TAT（ハーバード版）8 枚（1，2，3BM，4，8BM，13MF，15，20）。強迫現象尺度得点高（H）群 20 名，中程度（M）群 20 名に TAT を実施。	H 群に関して，以下の点が明らかになった。①登場人物間の相互作用の描写が乏しいこと，②登場人物の行為が良心的であること，③登場人物が自分自身に向ける評価が否定的であること。以上から，H 群の心理特性として，対人的関心の低さと道徳的発達の高さ，自己評価の低さが推測された。
土井真由子	2002a	アトピー性皮膚炎患者を対象に，TAT 課題呈示場面において，どのように刺激を体験するか，その中でその人がどのように立ち表れてくるかを，語られるものを通して検討する。	Ss.：臨床群はアトピー性皮膚炎患者 31 名，統制群は会社員・大学生など 16 名。 方法：TAT4 枚（2，9GF，18BM，19），MPI。	図版 2 では，統制群では，手前の女性対 2 者の間の心理的隔たりとして表現されることが多いが，臨床群では 3 者が 3 様に描写されることが多かった。図版 9GF では，上から覗く女性のもう一人の自分の姿という心象と捉えたことが臨床群の特徴だった。図版 18BM では，男性の背後の暗闇が具体化されないことが，臨床群の特徴である。図版 19 では，臨床群は輪郭が曖昧なために焦点付けが明確に出来ず，戸惑っている様子が伺われた。
土井真由子	2002b	アトピー性皮膚炎患者の攻撃性がどのような形で現れ，どのように体験されているのかを TAT を用いて探求する。	Ss.：大学生 269 名。うち臨床群 50 名，統制群 185 名。 方法：MPI，TAT（4，3BM，11，18BM，19），CMI の自律神経失調性愁訴 5 項目，アトピー性皮膚炎診断用項目。	①臨床群において，攻撃性衝動を伴った話が多く現れたが，攻撃性行為の由来が不明確である場合が多く，罪悪感が伴うことが少なかった。②内容分析の結果，統制群においては，攻撃的行為に罪悪感が伴っており，善悪の観念が根底に作用していると思われる反応が見られたが，臨床群では，犯罪や攻撃的行為に罪悪感が欠落していた。
土井真由子	2003	アトピー性皮膚炎患者が刺激と関わり対処する仕方について，語りという表現において検討する。	Ss.：アトピー性皮膚炎患者 31 名。 方法：TAT4 枚（2，9GF，18BM，19），MPI。TAT 反応における語りの構成の特徴によって類型化するためにクラスター分析を行い，AD1 群，AD2 群，AD3 群とした。	①AD1 群は刺激の明細化や具体的な場面設定を伴わない大雑把な構成が特徴で，心身症患者においてしばしば観察される，アレキシサイミアとの関連が示唆された。②AD2 群は，葛藤を伴う物語が作成され，“神経症的構造”を持つと想定された。③AD3 群は，刺激についての断片的な列挙と自らの感情や印象の表明が特徴的で，“刺激に対する両価的な態度”がうかがわれた。

関山　徹	2003	統合失調症患者の人間表象の特徴について，TATを用いて検討する。	Ss.：統合失調症患者（S）群21名，精神疾患を有する患者（N）群21名，大学生（C）群20名。 方法：SCORS-C，TAT（ハーバード版）8枚（1，2，3BM，4，8BM，13MF，15，20）。	S群は他の2群に比べて，以下の点で有意差を示した。①人物像の属性描写が乏しかったり表面的であったりした。②因果関係や時間経過についての説明が単純すぎた。③登場人物同士を関係付けて述べることが少なかった。以上より，統合失調症患者は，対人認知の基本的機能，対人関係への関心が乏しいと推測された。
石原志信	2003	TAT反応を手がかりに，バセドウ病患者の世界創造の在り方を探索的に検討することを目的とする。	Ss.：バセドウ病（B）群20名，社会人・学生（C）群30名。 方法：Harvard版TAT図版4枚（9GF，11，17GF，19）。	文節数はすべてB群が有意に少なかった。全図版において〈つながり欠如〉がB群に多くみられた。図版9GF，17GFにおいて，〈時間軸なし〉がB群に有意に多かった。図版9GFでは〈没入〉がB群に多くみられた。図版19では課題放棄がB群に多かった。
藤本麻起子	2005	危機状況へのあり方が語られやすい図版19への語りを「守り」の観点から検討することで，摂食障害者の基底気分を検討する。	Ss.：摂食障害の女性30名，統制群女性30名。 方法：Harvard版TAT（図版19を含む）。	①摂食障害群は，守り自体のイメージ，あるいは守りの機能がより希薄ではないかと考えられた。症状によって守ろうとしていると共に，摂食障害群の生き難さが推測される。②摂食障害者の守りのあり方は，不安を切り離すというものが考えられ，これは「解離」や過食行為と関連する可能性が推測された。
髙橋　悟	2005	自意識尺度によって測定される私的自意識が，被験者がTAT物語を見直したときになされる報告の内容とどのような関係があるかを検討する。	Ss.：大学生・大学院生男女60名。 方法：集団法。TATマレー版4枚（1，2，14，19），物語に関する質問紙と自意識尺度質問紙。	①私的自意識の高い被験者は，自身の物語を対象として捉えながら，同時に自己の内面や感情，気分などに注意を向ける程度が高い。②物語と自己の内面を関連付けた被験者に「気に入った」として選択された物語には，「物語中に示された葛藤および危機的状況」があるものが多く，また，「結末」が「幸」で終わっているものが多かった。③私的自意識の高い群が「気に入った」物語は，「登場人物の主体的な（解決）行動」があり，「結末」が「幸」で終わっているものが多かった。
一木仁美	2006	非臨床群におけるアレキシサイミア特性に関連した空想の様相と感情体験を，TAT反応から検討すること。アレキシサイミア特性の質問紙法と投影法の比較検討を行うこと。	予備調査　Ss.：大学院生6名。 方法：Harvard版TAT図版（1，3BM，3GF，4，10，11，12BG，13B，16）。 本調査　Ss.：大学生・大学院生176名からTAS-20得点H・L群各20名。 方法：TAS-20，TAT5枚（1，3BM，12BG，4，16），TATアレキシサイミア指数（TAI）。	①質問紙と投影法で捉えたアレキシサイミア特性のそれぞれにおいて，空想と感情体験の表れ方を検討したところ，投影法でのみ関係が見られた。②質問紙と投影法での結果の差異の要因を検討するためにTATの内容分析を行ったところ，アイレキシサイミア特性の空想は量的に少なく，外面性志向で漠然とした貧困な様子であり，感情体験は乏しく生き生きとした体験が少ないことが示された。③質問紙で有意な結果でなかったことには，自己評定のバイアスと，感情の認知と表出の困難を自覚していない一群がいるためであることが示唆された。

4．「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論の具体化へ向けてのTATの可能性

TAT研究のレビューを通して，TAT反応から，語り手の内的な対象イメージを査定し得る可能性があること，また，「個」と「関係性」からみたアイデンティティの様相が検討され得ることが明らかになった。ここで，1．で述べた，アイデンティティの基盤としての発達早期の自我の基盤―「関係性」―を検討するために，そして，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論の具体化へ向けて，TATがどのように有用であるか，さらに考察をすすめる。

(1) TAT反応から推測される「個」と「関係性」

TAT反応から対象との関係を検討した研究にみられたように，発達早期の「関係性」がTAT反応に現れるかもしれないという予測が可能である。例えば，発達早期に親的人物との十分な関係を形成しなかった者は，のちの重要な他者との関係において関係を築きにくく，アイデンティティ形成

が困難になるという問題が生じるかもしれない。このとき，語り手のTAT反応には，親的人物との希薄な関係，希薄な愛情体験，否定的感情などが投影される可能性がある。このように，TATにおいて「関係性」の未発達を思わせる語りがみられるもの，あるいは「語られないこと」は，発達早期に「関係性」の問題があると推測することができる。また，導入人物（絵の中に描かれていない人物の導入）からは，語り手との関係が深い人物が誰であるのか予想がたてられる。用いる図版は，石谷（1994）が家族カード，母親カード，同性カード，異性カード，集団カードを選定したように，アイデンティティ形成における「関係性」に関する語りが予測されるカードを選定あるいは作成する必要がある。

TATにより，個体内関係性が推測されたならば，TAT反応を現在のアイデンティティの様態との関連から検討することで，理論的に示されている，発達早期の自我基盤がのちのアイデンティティと関連しているという仮説の実証が期待できる。つまり，社会的関係性—Josselson（1992，1994）のいう同一化，相互性，埋め込み，および，慈しみ・ケア—の基盤として存在する個体内関係性が希薄であれば，青年期のアイデンティティ形成，および，成人期のアイデンティティ再体制化において困難さを示すかもしれないことの実証が試みられる。加えて，TATを使用して個体内関係性の査定を試みることの意義は，いうまでもなく発達臨床的援助の目的が背景にある。これをアイデンティティ理論に用いるということは，アイデンティティ危機とその援助，「心理療法過程へ入るときに，門口で解釈者自身が被験者と共に歩んでいくための道標（広瀬・氏林，1987）」となるであろう。つまり，アイデンティティ危機をもたらすものが，どの次元のものであるのかの推測が可能であると思われる。

「個としてのアイデンティティ」は，先述したように分離・独立した主人公を語るか，あるいは，揺らいだ主人公を語るかといったTAT反応から推測される。さらに，山本（1992）が示した「主体性の内在化の程度」—主体が自己の直面する状況に対してどのようにとりくんでいるのか，そのとりくみ方が，より主体的に自己のものとしてひきうけるかそうでないかの程度—が参考になるのではないだろうか。つまり，山本（1992）が述べる，より主体性が内在化された状態とは，充分自己を信頼し，状況に対して自由に動けることであり，これは「個としてのアイデンティティ」のあらわれ—自律的行動—と共通するものであるといえる。

(2) 今後の課題

方法論的観点からアイデンティティ研究におけるTATの実際的適用に関する提案を行う。先述したように，TAT研究においては，臨床群と統制群，あるいは，尺度によって類型化された群によるTAT物語の内容分析を行う研究が多いといえる。本研究が目的とする「個」と「関係性」からみたアイデンティティの検討においても，例えば，宗田・岡本（2005a，2006b）が作成を試みた尺度を用いて類型化を行い，各群の投影的「関係性」をとらえることで，関係性の様態がより明確にとらえることができるであろう。ただ，この尺度は先述したように標準化がなされていないため，今後の尺度の開発が待たれるところである。特に，宗田・岡本（2006）が今後の課題としたように，「個体内関係性」を測定し得る尺度の開発が期待される。「個体内関係性」尺度に関しては，別の機会に論じるが，アイデンティティの基盤となる発達早期の「関係性」を意識・無意識的に検討していく

ことが，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論の具体化にとって必要である。

本稿では，近年のアイデンティティ研究と日本における TAT 研究を検討し，TAT が，「個」と「関係性」からみたアイデンティティ理論の具体化に用いられる可能性について考察した。その結果，TAT 反応から，アイデンティティ形成に関わる発達早期の「関係性」を推測でき得る可能性が示唆された。また，「個としてのアイデンティティ」，および，社会的関係性を推測しうる可能性も示唆された。今後の「個」と「関係性」からみたアイデンティティ研究においては，TAT を用いて，発達早期の「関係性」と現在（青年期や成人期）のアイデンティティ―「個」と「関係性」―との関連の検討を試みることが期待される。

引用文献

土井真由子（2002a）．ある身体症状を抱える人の TAT 反応に関する一研究　京都大学大学院教育学研究科紀要，**48**，284-296.

土井真由子（2002b）．アトピー性皮膚炎を抱える人の攻撃的衝動心性に関する研究―TAT 反応をもとに　心理臨床学研究，**20**，394-399.

土井真由子（2003）．アトピー性皮膚炎患者の TAT 反応をもとにした語りの構成に関する一研究　心理臨床学研究，**20**，521-532.

Erikson, E. H.（1950）. *Childhood and Society*. New York：Norton.（仁科弥生（訳）（1977）．幼児期と社会　みすず書房）

Franz, C.E. & White, K.M.（1985）. Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, **53**, 224- 256.

Gilligan, C.（1982）. In a different voice: Psychological theory and women's development Cambridge, MA：Harvard University Press.（岩男寿美子　監訳　1986　もうひとつの声――男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ　川島書店）

原田（慶澤）　華（1999）．青年期の孤独感―質問紙と TAT 物語から見た内的世界の様相　京都大学大学院教育学研究科紀要，**45**，393-405.

広瀬　隆・氏原　寛（1987）．ある女子大学生の TAT 解釈事例―対象関係的思考の観点より　大阪市立大学生活科学部紀要，**35**，205-216.

広瀬　隆・氏原　寛（1989）．自我像の二面性と対象関係との関連について―TAT を用いたその予備的研究　大阪市立大学生活科学部紀要，**37**，189-199.

藤本麻起子（2005）．摂食障害者の内的世界―TAT 図版 19 における「守り」という観点から　京都大学大学院教育学研究科紀要，**51**，181-192.

一木仁美（2006）．非臨床群におけるアレキシサイミア特性の空想の様相と感情体験　心理臨床学研究，**24**，76-86.

井口敏之（2001）．思春期不登校症例におけるパーソナリティの検討―主題統覚検査（TAT）の内容分析から　小児の精神と神経，**41**，233-242.

石原志信（2003）．バセドウ病を抱える人の世界創造のあり方について―TAT 反応を手がかりに　京都大学大学院教育学研究科紀要，**49**，422-429.

石谷真一（1994）．男子大学生における同一性形成と対人的関係性　教育心理学研究，**42**，118-128.
Josselson, R.（1992）．The space between us: Exploring the dimensions of human relationships. San Francisco: Jossey-bass.pp6-9.
Josselson, R.（1994）．Identity and relatedness in life cycle. In H. A. Bosma (Ed.), Identity and development : An Interdisciplinary approach. Thousand Oaks: Sage. pp.81-102.
葛西理佳子（2006）．フォークロージャー的心性を持つ青年の親への態度　日本青年心理学会第 14 回大会発表論文集，58-59.
加藤　厚（1986）．同一性測定における 2 アプローチの比較検討　心理学研究，**56**，357-360.
加藤　厚（1989）．大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究　心理学研究，**60**，184-187.
草島弘典（2005）．TAT の使用に関する新たな一提案―自己の物語という視点から　中京大学心理学研究科・心理学部紀要，**4**，95-107.
Marcia, J.E.（1966）．Development and validation of ego-identity Status. *Journal of Personality and Social Psychology*,3,551-558.
宮下一博（1987）．Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討　教育心理学研究，**35**，253-258.
三好智子（2001）．“個”・“集団”間葛藤の観点からみた青年期後期の自我同一性の形成過程　心理学研究，**72**，298-306.
無藤清子（1979）．「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性　教育心理学研究，**27**，178-187.
永田彰子・岡本祐子（2005）．重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の検討　教育心理学研究，**53**，331-343.
中西信男（1983）．青年期の自我同一性地位に関する研究　創立十周年記念論集　大阪大学人間科学部　pp.395-453.
西本智恵（2000）．心理検査に見られる慢性腎疾患患児の心理的特徴について　広島大学教育学部紀要　第三部，**49**，263-270.
岡本祐子（1997）．中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版
岡本祐子（編著）（2002）．アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房
岡本祐子（2006a）．心理力動論から見た中年期危機への援助―自らの人生を見直し、語ることによる自己の再生　岡本祐子（編著）中年の光と影―うつを生きる　至文堂　pp.238-248.
岡本祐子（2006b）．「個」と「関係性」から見た成人期のアイデンティティ発達・変容過程に関する研究　平成 15・16・17 年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書
奥田紗史美・前田健一・岡本祐子（2003）．葛藤場面における他者との関わりとアイデンティティの関連　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要，**2**，58-68.
関山　徹（2001）．強迫性格と TAT 反応―強迫傾向を有する大学生の人間表象の分析　ロールシャッハ法研究，**5**，13-27.
関山　徹（2003）．統合失調症患者の TAT における人間表象　ロールシャッハ法研究，**7**，23-36.
清水紀子（2004）．中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ　発達心理学研究，**15**，52-64.
清水紀子（2006）．TAT 物語における「しなやかなアイデンティティ」―葛藤の解決過程に注目して　日本発達心理学会第 17 回大会発表論文集，643.
清水紀子・杉村和美（2006）．発達心理学から見た中年期―失いつつ得る　岡本祐子（編）中年の光

と影—うつを生きる　至文堂　pp.93-102.
宗田直子・岡本祐子（2005a）．アイデンティティの成熟をとらえる際の「個」と「関係性」の概念についての一考察　日本青年心理学会第13回大会発表論文集，42-45.
宗田直子・岡本祐子（2005b）．アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討—「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み　青年心理学研究，**17**，27-42.
宗田直子・岡本祐子（2006）．「個」と「関係性」からアイデンティティをとらえる試み再々考—大野・高村コメントへのリプライ　青年心理学研究，**18**，（印刷中）．
杉村和美（1999）．現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達　岡本祐子（編著）女性の生涯発達とアイデンティティ　北大路書房　pp.55-86.
杉村和美（2001）．関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：2年間の変化とその要因　発達心理学研究，**12**，87-98.
鈴木睦夫（1992）．TAT（主題統覚検査）　氏原　寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕（編）心理臨床大事典　培風館　pp.530-535.
鈴木睦夫（1997）．TATの世界—物語分析の実際　誠心書房
鈴木睦夫（1998）．TAT（Thematic Apperception Test）　岡堂哲雄（編）心理査定プラクティス　至文堂　pp.35-44.
鈴木睦夫（2004）．TATとロールシャッハ・テスト—相似点と相違点　中京大学心理学研究科・心理学部紀要，**4**，11-25.
高橋　悟（2005）．TAT課題における自己体験と「自意識」　京都大学大学院教育学研究科紀要，**51**，204-217.
谷　冬彦（2001）．青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成　教育心理学研究，**49**，265-273.
豊田洋子・赤塚大樹（2004）．TAT分析・解釈の視点としての防衛機制　愛知県立看護大学紀要，**10**，59-65.
海本理恵子（2004）．TAT再考　京都大学大学院教育学研究科紀要，**50**，386-398.
海本理恵子（2005）．TAT（Thematic Apperception Test）に表されるプロットについて：ナラティブの観点から　京都大学大学院教育学研究科紀要，**51**，153-166.
渡邉照美・岡本祐子（2005）．死別経験による人格的発達とケア体験との関連　発達心理学研究，**16**，247-256.
山田みき・岡本祐子（2006）．「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ　日本発達心理学会第17回大会発表論文集，306.
山本和郎（1992）．心理検査TATかかわり分析—ゆたかな人間理解の方法　東京大学出版会
山本里花（1989）．「自己」の二面性に関する一研究—青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討　教育心理学研究，**37**，302-311.
山下京子（2003）．TAT反応に示された対象関係に関する研究　広島女学院大学論集，**53**，1-26.
山下京子（2004）．TATとロールシャッハ・テストに示された対象関係　広島女学院大学論集，**54**，1-19.